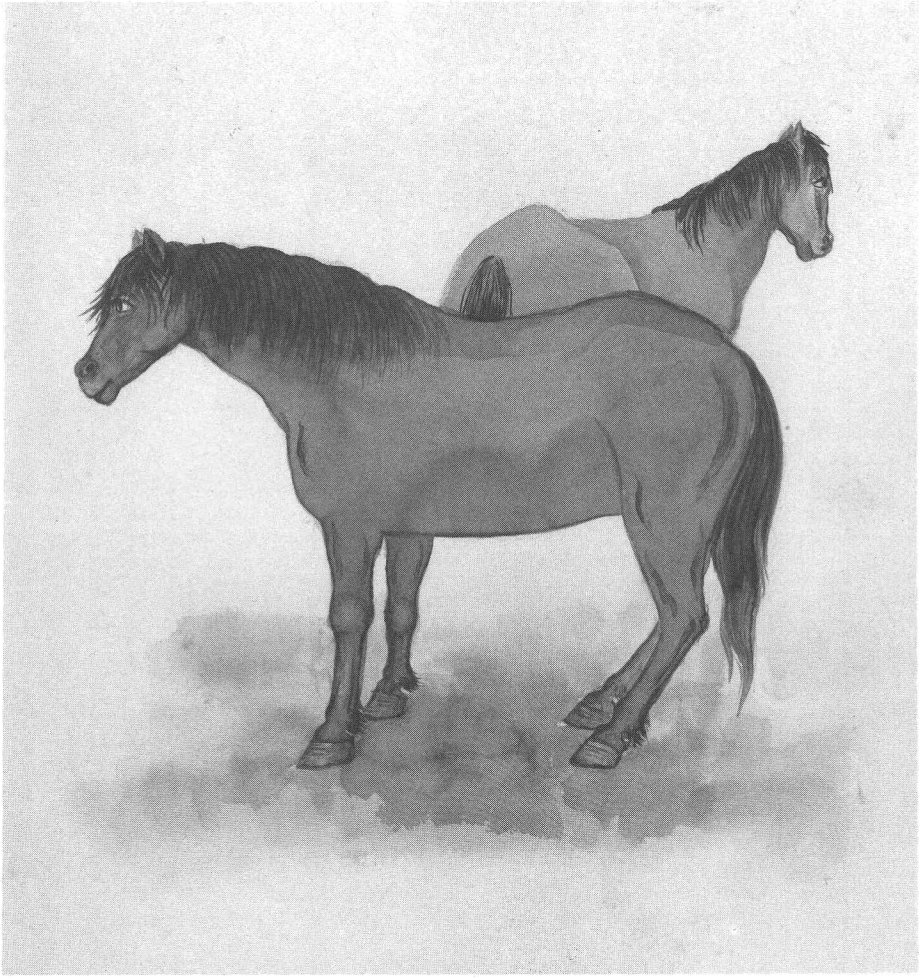
# 季刊　連句　第31号

平成二年十二月一日発行



# 季刊連句　第31号　目　次


連句と若者（南柏雑記　29）…… 1

芭蕉の連句と現代連句　……　廣田二郎 …… 2

「蔦の羽も」の巻鑑賞（X）……　東　明雅 …… 4

第十回俳諧芭蕉忌　　第三十五回猫蓑会　…… 8

正式俳諧興行　　脇起り二十韻　　新藁の　　捌　秋元正江

文　福井隆秀

二十韻　七巻　　捌　　氏原正雄　雑賀　遊　杉江杉亭　東　郁子

本屋良子　山崎一恵　若尾よしえ

文　　下鉢清子　原田千町

「蓑虫」付勝練習二十韻 …… 14

第五回国民文化祭 ……　秋元正江 …… 16

半歌仙九巻　　捌　　東　明雅　　秋元正江　　式田和子

下鉢清子　　杉内徒司　　中島啓世

原田千町　　東　郁子　　福井隆秀

新庄市第二回全国連句大会 ……　式田和子 …… 20

作品　三巻　捌　　式田和子　　杉内徒司　　杉江杉亭

作品　四巻　捌　　秋元正江　　瀧川雅代　　東　明雅

文音　　清水一與・矢崎　藍 …… 22

百萬のこと ……　佐藤廣幸 …… 24

雁帛往来 …… 29

新刊紹介 …… 7


表紙（木曽駒）　宮　崎　龍火子

# 連句と若者

## 南柏雑記 29

雅

松山の国民文化祭で連句は一気に盛り上がった。皇太子殿下の台臨を仰ぎ、四十二の俳席で一斉に俳諧が興行されたということは、空前の盛況であり、感激したことであった。先師芦丈翁がもし御存命であったら、さぞかしおよろこびなされたことであろう。連句を国民文化祭の行事の一つに加えるのに尽力された草間時彦先生、暉峻康隆先生、そして、二年前からこの大会の準備に没頭して来られた鈴木春山洞氏、この三方の功績を連句人は決して忘れてはならぬだろう。

そのように、今度の松山の国民文化祭連句大会は大盛況であり、大成功であった。ただ、皆が気が付いていたように、集った人たちの平均年齢が極めて高く、若い人たちの影が寥々たるものであったことに、いささかの懸念が残ったのも事実である。会場の子規記念博物館前で、全員集合して写真を撮ったが、多くは白髪・倚杖の人で、暗澹とした気になったのは私一人だけではなかった筈である。

この日「連句の来し方行く末」という記念講演をされた暉峻康隆先生も、この点を特に取り上げられて、連句は簡素な式目を早く作るべきだと主張された。簡素な式目が出来れば結構であるが、果して、それだけで若者を吸引できるかというと、私は大きな疑問を感ずる。

連句が若者に魅力がないのは、彼らの学校教育の在り方によるものである。現代の中学・高校の国語教育は、古典を軽視し、芭蕉のすぐれた連句など一つも取り上げていない。たまたまあっても大学受験に関係のないものとして実際に教えられないし、また、はっきり言って生徒に芭蕉連句のすばらしさを説くことのできる教師はきわめて稀と言ってよいのが実情であろう。この点は大学の文学部においても大同小異である。少年・青年期になじみのないものに若者たちが魅かれないのも尤である。

次に、彼らを魅するだけの新しい連句の作品がまだ現われていないということがあげられよう。すばらしい、これぞ平成の連句と、彼らに示せるものがどこにあるか。よい作品も作らず、彼らを引きつけるものもないくせに、ルールがどうだとか、式目が難しすぎるとか言うのは本末顚倒であろう。魅力さえあれば、どんな難しいルールでも、こなして行くのが若者である。若者を馬鹿にしてはいけない。マージャンのルール、ゴルフのルールは決してやさしくはないのである。

# 芭蕉の連句と現代連句

廣田二郎

『古事記』には、神武天皇と大久米の命、同命と伊須気余理比売、日本武尊と御火焼の老人との問答の歌を記している。日本で古代以来五七調を基本とする問答の哥が作られていて、それらについて『古事記』の成った奈良朝時代に語られていたことが知られる。また、同時代にもこの問答唱和形式による作哥は勿論行われており、そういう基盤の上に神武天皇や日本武尊の問答哥も極めて自然に語りつがれ、受容されていたのである。

以来この伝統は中断することなく、近代にまで一貫して流れ続いて来ており、とりわけ中世には二句の問答哥に三句目を付け、さらに四句以上、ついには百句に至る長大な作品にまでなり、作者も三人以上の複数に増加した。作品の内容も高まり、宗祇作を頂点とする連哥のジャンルが成立する。そして、連哥は中世武士階級の詩として栄えたのであるが、また二句の付合による日常語の問答哥も広く一般に好まれて来た。それは、江戸時代に入ってから、貞徳等による百韻俳諧連句にまで成長する。貞徳一派の連句でも、ことばはやはり一般的な日常語――俳言――を用いたが、しかし連句を文芸にまで高めようと考えたために、古代以来持続して保有していた諧謔滑稽のおもしろみを失ってしまった。それを回復しようとして、宗因・西鶴等の談林調俳諧が興り、芭蕉もその渦中にあって大いに笑い興じる数年間を過している。しかし、その詩性を喪失した低次な諧謔滑稽に空しさを感じはじめ、彼は三十代の終りに近づいた天和年代から、俳諧連句に詩性を取り戻し、もって近世詩として確立しようと意識しはじめる。『次韻』『虚栗』などの連句作品にそれを見ることが出来る。滑稽なことばの遊戯から超脱して、吟詠を純正な詩として高める、連句ジャンルにおける史的な変革を遂行した。

文学史における史的変革は、いずれの国にあっても、外国文学の思想、表現・用語、トーンの摂取を方法とするが、芭蕉も天和の俳諧の史的変革は漢詩文から得ている。

しかし、彼の求めたところは俳諧の史的変革であったから、用いることば、表現は俳言――古典文学に用いられていない、日常一般の通用語や漢語の類――のそれであった。そうして、貞享から元禄年代にわたって、『野ざらし紀行』『笈の小文』『奥の細道』の旅の体験と、旅中における各地門人との連句興行、発句詠吟についての指導、質疑応答などを通して、発句・連句・紀行・日記・俳文等の全ジャンルを包括する蕉風俳文学の体系を確立した。

この達成は、全俳文学史を通じての最高の水準を極め、以後現代に至るまで、これを凌ぐものは出ていない。江戸中期安永天明の蕪村、末期文化文政の一茶等も大きくいって元禄以後の蕉風の展開の裡にある。その延長の線上に明治時代に入ってからも俳文学はあった。

しかし、鎖国制を解いた明治期には、西洋の近代文明が洪涛の様に押し寄せて来、文学も全ジャンルにわたって近代化されて行った。俳諧文学も例外ではなかった。明治二十年代に子規を中心とするグループは、俳文学革新の流れを主導した。虚子は、明治三十七年八月発行の「ホトトギス」で従来の俳諧連哥の名称を連句と改めたが、それより先、子規は「連俳は文学に非ず」の説を「芭蕉雑談」の中で唱えている。

以上の様なことから「連句は文学に非ず」とする説が全俳壇を制圧し、連句を制作享受する人達は稀少になっていった。明治中、後期から大正昭和を経て、戦後二十余年を経るまで、そうした状況は変らなかった。

しかし、昭和四十五年春から四十七年にかけて季刊雑誌「すばる」に安東次男氏が連句をすぐれた詩として認め、芭蕉七部集の哥仙連句の評釈を連載しはじめてから状勢は一変した。すぐれた詩人であり、フランス近、現代詩に精通している安東氏の所説、評釈は俳壇、文壇に大きな衝撃を与えた。子規、虚子等は、連句が付け進むに従って二付の付合毎に詠むところが変化し、哥仙、百韻等の全巻にわたって一貫した意味・内容を持っていないから文学ではないという説を唱えた。西洋近代の写実主義文学の全面的影響下に入っていたわが国の文壇、俳壇は、子規等の連句非文学説に盲従し、それが八十余年も続いていたのであったが、その間に西洋ではフランスのボードレールに始まる象徴派から二十世紀に入ってからのマラルメ、ヴェルレーヌ、ランボー、ヴァレリー、エリュアール、グールモン、ブルトンなどの抽象派の現代詩まで、詩のジャンルにおける大きな文学史的変革が展開していた。わが日本の俳人達、俳諧研究者達はそのことを知らなかった。その蒙が安東次男氏によって開かれた。またフランス文学者であり、詩人であり、俳句の作者であり、俳誌「槇」の主宰である平井照敏氏も連句をすぐれた詩型式と認め、安東説を支持している。現在では、こうしたことをきっかけとして、明治以来の連句非文学説は打破され、連句はすぐれた詩として評価し直され、また連句を制作するグループも各地に見られるに至っている。

これらの総体を包含する現代連句の詠むところは人間存在の現実の相（すがた）であり、自然世界の無限の推移の態様である。従ってことば、表現もわれわれが日常一般に用いている用語、表現、すなわち俳言をもってする。つまり俳諧文学としての本質を確固として保持しているのである。こうした点において芭蕉の連句と現代連句はまさに共通のあり方を持っている。芭蕉の連句と現代連句の用語、表現が異っているのは、ことばと、それをもってする表現は時代とともに変化する――つまり流行するので、一見著しく異る様にも思われるが、その本質における不変性すなわち不易なるものは確固として保持しているのである。ただ詩としての高さにおいては、現代連句はまだ満足すべき水準には達していないので、つねに芭蕉連句の次元を思い、その高さに至ることを目指すべきであろう。

# 「鳶の羽も」の巻　鑑賞（X）

東　明雅

30

青天に有明月の朝ぼらけ
湖水の秋の比良のはつ霜　芭蕉

（秋。秋。人情無）

（現代語訳）青々と澄んだ朝空に有明月がかかり、湖水も秋たけ比良の峯には初霜がおりる時節となった。

（付心）其場の付。

（付味）響。「三冊子」にこの付合を評し、

青天に有明月の朝ぼらけ
湖水の秋の比良のはつ霜

前句の初五の響堅きに心を起し、「湖水の秋」「比良のはつ霜」と清く冷じく、大きなる風景を寄す。と言っている通りである。

（転じ）この転じもよく利いていて、打越・前句の修羅場のイメージが全く消滅して、ただ冷々とした広々とした景色に転換され、急迫の気分から優游の気分に転じた。

（補説）湖水、ここはもちろん琵琶湖のことである。前句の「青天」に応じた用語。比良は琵琶湖東岸にある山、海抜千二百米余。「前句の手柄に競はず、それに花を持たせて助けながら巧みに引立たせて、青天―湖水、有明月―初霜と、景象の対応、映発を示し、前句の景象を活かし深むべきものとしてこの大観を寄せ、天象に地象の骨格を与へて大画面を完成せしめた処、さすがに一座の師父たるに背かぬ付振りである（天野雨山「猿蓑連句評釈」）

はつ霜は冬の季語であるが、ここでは特に「秋の……はつ霜」と晩秋のころの初霜としている。近江八景で「比良暮雪」が有名であるため、比良の初雪では陳腐となるので、初霜としたのであろうが、雪と異なり、霜では遠望の景としてはふさわしくない。これについてもさまざまな説があるが、要するに詩人の心象風景としての初霜で、その虚実を論ずるのは意義がないことであろう。

31

湖水の秋の比良のはつ霜
柴の戸や蕎麦ぬすまれて歌をよむ　史邦

（秋。蕎麦。人情他）

（現代語訳）比良の初霜が見られる頃、湖畔に閑居する隠者は、畠の蕎麦を盗まれたが、それを歌に詠んで一向意

に介しない。

（付心）起情の句。前句のさわやかな景から、物慾にこだわらぬ洒脱な人柄を付けた。また、「古今著聞集」巻第十二にある澄恵上人の面影の付（補説参照）。それに湖南の幻住庵に住んだ芭蕉のイメージがダブっているのであろう。

（付味）前句、湖国の秋の爽涼の気分に、天空海濶、洒脱で楽天的な人柄がよくマッチしている。

（転じ）前の二句に粛殺の気が滞っているのを一転させ、ユーモアの気分を出して緊張感をほぐしている。

（補説）この前句が、和歌の下句の調子に似ているから、上句を補うような気持で付けられている。「歌をよむ」とはその気持のあらわれでもある。

この付句の面影になっているのは、「古今著聞集」巻十二「澄恵僧都蕎麦盗人の歌を詠む事」に見られる次の話である。

この僧都の坊の隣なりける家の畠に、そまむきをうへて侍けるを、よる盗人みなひきてとりたりけるをききてよめる。

ぬす人は長はかまをやきたるらんそばを取てぞはしりさりぬる

「そば」に蕎麦と衣端（ももだちともいう。袴の左右、腰の部分のあいた縫い止めの部分）。「蕎麦を奪る」と「衣端を取る」（ももだちを取る。動作を自由にするため袴のももだちをあげて帯にはさむこと）の掛詞の洒落。

蕎麦は「猿蓑付合考」に「唯蕎麦と斗は雑也とぞ。さるを秋につれては秋とする事、句のなり安きやうにと事を広くしたるにや。扨新蕎麦は九月中頃より末専なれば、比良に霜みゆる時節なり」とある。

作者の史邦は、先に盧同が男を出し、ここでまた澄恵上人の面影を出している。この人には古典癖があったらしい。名残の裏になって、軽く一巻をあげるようつとめるべきところに、こんな特異な人物を持ち出すのは、ちょっとどうかと思われないでもないが、名残の裏でも、折立だからまだ許されるかも知れない。

32

柴の戸や蕎麦ぬすまれて歌をよむ　　凡兆

ぬのこ着習ふ風の夕ぐれ

（冬。ぬのこ。人情自）

（現代語訳）この草庵では蕎麦を盗まれてそれを和歌に詠むようなこともあったが、このごろはまた風が冷たくなって布子を着ならうようになった。

（付心）会釈の付。其人の付。柴の戸に住む人の状態を秋から冬に季移りしながら描いた。

（付味）蕎麦と布子は位の付になっている。また、両句には一種のわびしい風情がうつりあっている。

（転じ）打越は湖国の秋の清爽な景色で、前句とあわせて広々とした一種の朗らかさがあるが、この付句は冬の寒い風をわびる人の姿があり、前句と付けると一種のあわれさがにじみ出て、気分の上でも大きな変化がある。

（補説）前句の人をおそらく初老も過ぎた人と見て、その人の衣類をあしらったものである。ぬのこには袷に対する綿入れの意味と、絹物の小袖に対する木綿のものという意味とがあるが、ここでは前者に重点を置き、季節の推移とそれに対する老人の心境とを詠んだものと解釈した方がよい。後者に重点を置くと、今までは小袖など着ていた人が零落して木綿物を着習うようになったという意味になる。しかし、ぬのこに対するわびしい気分は、ここであまり強調すると、前句の余裕が活きてこないので取らない。

33

ぬのこ着習ふ風の夕ぐれ
押合て寝ては又立つかりまくら　芭蕉

（雑。人情自他半）

（現代語訳）風が身にしみ布子が身になじむころ、旅人たちは押しあいへしあいで一夜の宿を明かし、また別れ別れに発って行くのである。

（付心）其人の付。また面影の付（補説参照）

（付味）位付。ぬのこに連想されるわびしい情趣が付句にもうつっている。うつり。

（転じ）打越の句は柴の戸に住んでいても歌を詠むほどの余裕があったのに対し、これは全く俗な庶民の生活そのものの描写で、気分の上からも大きな転じである。

（補説）

「押よふてねては又たつかり枕
火とぼしにくるればのぼるみねの寺
ケ様の句ども、たれぞの面影に立申候句にて御ざ候、尤、他流にもケ様の句ども御座候へども、何の心もなく仕たると、心をよせて仕たると、付肌各別の意味出申候」

（「浪化宛去来書簡」）

右の文章によれば、芭蕉のこの句は誰かの面影で付けられていることになる。芭蕉はこの句を作る前の年、「おくのほそ道」の旅で、半歳にわたって、さまざまの土地でさまざまの旅宿の体験を実際にして来ているのである。むさくるしかった飯塚の宿、盲法師の奥浄瑠璃を聞いた塩釜の宿、泊るべき宿がなくて困った石の巻の体験、ことに「蚤虱馬の尿する枕もと」と詠んだ尿前の封人の家、遊女と一つ家に寝た市振の宿の思い出などは、この句を生む背景として、きっと去来・凡兆・史邦など、この一座の連衆にも話されたに違いない。芭蕉はこの句を作りながら、「おくのほそ道」の体験を反芻していたのであろう。ことにその旅の途中、加賀の山中温泉での三吟の一節、

霰降左の山は菅の寺　北枝
遊女四五人田舎わたらひ　曽良
落書に恋しき君が名も有て　翁

に出て来る田舎わたらいの遊女などは、この句の面影としてぴったりである。遊女に限らず、物詣での旅の道者など、一人の旅と見るよりは、四・五人の複数と見る方が、打越からの変化もあってよい。

せまいむさくるしい木賃宿、あるいは宿坊などに泊りあ

わせ、押しあいへしあい、蒲団もろくになしのごろ寝に一夜を明かした旅人たちが、お互いに名も知らぬまま、西東に別かれ、また、そのような日々を重ねてゆく、それはまさに貧しく、わびしい浮世の象徴であり、そうなり得た点にこの句のすばらしさが存在する。

34

押合て寝ては又立つかりまくら　　去来
たゝらの雲のまだ赤き空

（雑。人情無）

（現代語訳）旅人たちが早立ちして行くと、鋳物師がたたらを踏んで鉄を造るその煙が雲となって、まだ暗い空を赤く染めている。

（付心）其場の付。天相の付。

（付味）ここは花前の句（次は匂の花）であるから、其場の景色を軽く付けている。

（転じ）打越の夕ぐれから、この句は夜明けと時刻は変わっているが、気分はあまり変わっていない。

（補説）この句は、この巻中一番の難句で、諸説紛々、帰するところを知らぬ有様である。大きく二つに分けて、たたらを踏鞴と解し、鋳物師の作業と関係させて説く説と、たゝらを地名、それも山あるいは浜の地名として見る説とに分かれる。しかし、これを山または浜の地名として見ると、三句前に「湖水の秋の比良のはつ霜」があり、式目にははずれていないけれども、湖水と浜、比良とたたら山、しかも同じように天相と結ばれた人情無の句であれば、遠輪廻（同じような事物・趣向が何句か距って出ること）になりはしないか。私はそのようなところから、踏鞴（たたら）説に賛同するものである。

去来は前句を、芭蕉が自然と旅ゆく自分とを念頭に作った句であると考えていた。それで旅人としての芭蕉に、珍しい踏鞴などの景を付けて、さらに彼の旅心を誘う意があったのではないかと思う。古注のうちでは、「旅同者の朝まだき立出る景色を付たるにて、たゝらは鋳物をする道具也。鍛冶・鋳物師等皆早起にして、大なる鋳物には鑪鞴（たたら）を用ゆる。其煙炎夜の明けきらぬうちは、赤く立登りて見ゆるなれば、その煙りといふべきを、東雲に懸合せて雲と作りたる手柄たるべし城下町など旅立さま見ゆるが如き付也」（「猿みのさかし」）が最も妥当で、わが意を得ている。

☆新刊紹介☆

☆松山連句会　　永田黙泉編
いでゆのかをり　　平成二年十月一日刊
第二巻
同会の作品十一か年分一七八巻所収

☆歌仙鼎集　　岩渕喜代子編
歌仙十六巻とコメント　森玲子
所収　　一九九〇年十月初版

# 第十回 俳諧芭蕉忌

第三十五回 猫蓑会

平成二年十月十七日
於 深川芭蕉記念館

恒例の芭蕉忌を十月十七日（水）深川芭蕉記念館で修し、正式俳諧を厳粛な中に和気藹々と興行した。その後、二十韻七巻を首尾した。参加者 三十二名

第一部 正式俳諧興行 「しぐれ哉」 一巻

第二部 二十韻七巻

㈠ 役割

宗匠 秋元正江
脇宗匠 式田和子
副宗匠 豊田好敏
執筆 福井隆秀
知司 下鉢清子
副知司 滝川雅代
座配 小林千雪
座見 仏淵健悟
花司 原田千町
香元 内田麻子
配硯 梅田利子
同 篠原達子
同 蒲原志げ子

㈡ 次第

一 席改め
二 席入り
三 配硯
四 献花
五 執筆呼び出し
六 文台捌き
七 俳諧興行
八 花前
九 献香
十 花の句披露
十一 端作り
十二 吟声
十三 文台返し
十四 作品奉納
十五 納硯
十六 挨拶
十七 退席

## 二十韻　しぐれ哉

秋元正江　捌

新藁の出初めて早きしぐれ哉　翁
北窓ふさぐ里の家々　明雅
連弾のピアノ練習きりもなし　和子
黄色のリボン猫の首輪に　清子
竹林（ウ）の奥まで白し十三夜　千町
誘ひ優しく漸寒の頃　郁子
秋深きいづこも恋の長電話　利子
酒を覚えて帰る合宿　達子
日に五回神をおろがむ民もあり　麻子
予防注射はみんな嫌ひで　志げ子
本（ナオ）・名刺・ノート・封筒・再生紙　好敏
パソコン特訓蚊遣こもりぬ　健悟
月涼しひとり碁ならべ落着かず　雅代
貴妃の凝脂と紛ふ柔肌　千雪
人魚とは気づかせぬまま抱かれて　正雄
屋号は米屋安房のバーバー　徒司
駅（ナウ）うらに放置自転車積まれたる　遊
夢のどこかにききし春雷　澄子
歳々の花尋めゆきて花に老い　正江
巣立の鳥の一斉に発つ　執筆

## 執筆を仰せつかって

福井隆秀

先生から、つぎの執筆を申し渡されて以来、正直のところ何だか落着きませんでした。私の役を辿ってみますと、所作と発声と執筆の三つに分かれています。所作もなかなか細かいことが指示されております。

私は子供の頃より暗記するときは、なにかそれと類似のもの、人の顔とか語呂合せとかを思い浮かべることにしています。そこで、執筆が仮座から本式の座に着いたときに、文台を下ろして、硯箱の上の文鎮を文台の筆止めの脇に置き、硯箱をやや右に動かして蓋を取り、撫でる所作をして畳に置き、小短冊を蓋のなかに入れる、文台捌きの始めの場面。

簡単なのにどうもトチってしまう。そこで私の暗記法、文鎮の表音に似たもの――幸い知人に二村文人さんが居られるので、文人さんの顔を思い浮かべれば、ブンチンのまずしょっぱなの動作が出てきます。つぎの硯箱は、頭文字をとって、ス。そして小短冊は、コ。つまり、ブスコ（変な語呂になって申しわけありません）と覚えれば、動作はスムーズに運ぶわけです。他にも、こんな風にして覚えたところがあります。

所作のつぎは、吟声。若いとき、声（恋ではありません）を傷めたことがあって、苦手です。最後の難関は、お習字。何十年振りかで墨を磨り筆をとって、貴重な経験をさせて頂きました。

## 寒々と

氏原　正雄　捌

香捧げすり足の音寒々と　正雄
耳付の壷菊と萬両　和子
風少し老舗の暖簾動かして　元子
キャッチ・ボールに余念なき子等　雅代
多摩川に櫓提灯盆踊　政志
車を止めて誰と見る月　和
ちちろ虫女房酔はしてどうするの　志
腕のばせば夢でありけり　元
無念やな小銃のみで出兵か　和
蹴った石ころ猫に命中　代
水槽の金魚ぱっちり目をさまし　和
御霊祭の笛の喨々　元
ひたむきに生きてやうやう逢ひし女　代
こちら浮気と知るや知らずや　雄
初雪のほどなくやみて三日の月　元
煎じ薬の匂ひ満つ部屋　和
山里に媼がつたふ縞紬　代
田楽豆腐味噌を甘くす　元
花ふぶき連れ立ちくぐる大手門　代
付句案じつ青き踏みゆく　志

## 秋の関址

雑賀　遊　捌

夕汐の匂へる秋の関址かな　遊
過ぎゆく風も漸寒の月　清子
クラヴサン奏づる音の爽やかに　千町
サテンステッチ絲を継ぎたす　正江
弁松の折の蒲鉾焼魚　子
玉三郎に孝夫惚れ惚れ　町
付睫毛閉づれば彼の唇が　子
聖書置かるるナイトテーブル　町
プードルにチェックの外套着せやりぬ　江
雪像作る自衛隊員　町
平和賞受けし露国の大統領　子
闇に煙草の火の見えて来し　遊
いつからかわりなき仲となりにける　町
AVギャルの演技ばかりで　江
蜘蛛の巣に片割月のひっかかり　町
暑気払ひにと酒を勧めて　子
地下へ行く階老いのスニーカー　江
キョスクで買ふガムとマガジン　遊
十一面観音さまの花明り　江
鶯になりたき稚な子の夢　子

## 秋深む

杉江　杉亭　捌

お六櫛置きたる店や秋深む　杉亭
せせらぎ耳に漸寒の月　徒司
鬼灯のなかなか鳴らぬ子等もゐて　弘子
牛乳売りのおとなしき驢馬　冬乃
ジーンズを穿けば心も軽やかに　治子
流す涙も恋の小道具　同
だまされたことも知らずに燃え上り　弘
長距離バスは故郷へ発つ　冬
麦の穂に見え隠れする雀どち　治
焼酎つくる教会の裏　司
旗振って医師を迎ふる島の人　同
いくさの跡の今に残れる　冬
念願の統一果たす西東　弘
浮利追ひかけて企業倒産　司
膝と膝摺り寄る炬燵月さしぬ　弘
口移しする節分の豆　冬
ご隠居は何祈るらん屋敷神　司
たはむれ猫のまたも集り　弘
玉堂の画帖に残る花づくし　亭
宅急便に托す伊予柑　治

## 時雨忌や

東　郁子　捌

時雨忌や翁遺愛の蛙石　郁子
冬浅き庭訪るる人　健悟
草野球集ひ来る子ら賑やかに　千雪
手挽きコーヒー碗に香の立つ　澄子
創刊のねこみの通信つくる月　悟
呼び出し電話声のやや寒　雪
青蜜柑分け合ふだけで充ち足りぬ　悟
いつもの烏またも来てゐる　澄
組鐘が響くケルンの大聖堂　同
除隊の知らせ母の手許に　悟
水芭蕉観んと溢るる夏帽子　雪
碁仇と酌む月の冷酒　郁
下町の玉三郎の嫋やかに　悟
大立廻り死ぬの生きるの　雪
悪妻と言はれ続けて半世紀　澄
ラジオ講座の流すロシア語　悟
北方の領土還るはいつの日か　郁
鮎挿す湖を珍らしと見る　澄
花明りはるかに遠く裏伊吹　雪
名物の店草餅の色　澄

## 桃青忌

本屋　良子　捌

吟声の庵に響くや桃青忌　良子
冬あたたかに集ふ連衆　隆秀
くっきりと浮かぶ稜線画架立てて　啓世
ジョギングにまでついてくる犬　達子
月高しショーウィンドウのニューモード　路子
男の持てる蘭の花束　同
気まづさが漂ってゐる秋の湖　同
あくまで割勘可愛げのなさ　世
ガソリンの値上げ株落ちどうしよう　秀
夢のつづきを見むと眼を閉ぢ　世
革布団赤児を膝に弾ませて　達
蒿雀飛びたつ方に昼月　世
コードレス電話こっそり持ち込みし　同
セクハラ部長恋の邪魔する　秀
仕組んだと覚しき絡繰りあばかれて　達
馬頭観音きれながの目よ　世
町人の腰に下がりし薬入れ　達
一刀彫りで小さき立雛　路
墨堤の桜に母と草団子　秀
ピアノ流るるあしたのどけき　世

## そぞろ寒

山崎　一恵　捌

そぞろ寒芭蕉稲荷に詣でけり　一恵
木犀の香の残る有明　明雅
おもたせの落鮎皿に盛り上げて　志げ子
孫の写真の先づは出て来る　麻子
端居して老も若きも賑はひぬ　淳子
今年は殊に暑き八月　雅
するり脱ぐストッキングの銀のラメ　淳
見てはならないものを見たいの　志
板塀の囲む工事は秘密めき　麻
ビバリーヒルズ真似る豪邸　同
ノーベルがあの世で嗤ふ平和賞　淳
妻ならぬもの連れてぬけぬけ　同
熱燗に溶けて消えしや雪女郎　志
のっぺらぼうはいつも風邪声　雅
満月に遠ざかりゆく寒念佛　淳
遊びをせんと待つや停年　麻
変人と言はれて犬と猫と住む　雅
ボートレースのカップ高だか　志
花吹雪灯ともすころの小さき村　麻
畑打ちをへて仕舞ふ鋤鍬　志

# 桃青忌

若尾よしえ　捌

大川の鷗に会ひぬ桃青忌　よしえ
角の八百屋に並ぶ白菜　久美子
声高に九九を唱へる幼ゐて　好敏
漸く引きしコードレスフォン　みづゑ
ハイウェイ真正面に月の富士　同
柿もぐ彼はたのもしき彼　敏子
うすら寒優しき言葉胸に秘め　ゑ
お稲荷様は片手拝みで　敏
がたぴしの敷居に下駄木打ち付けん　ゑ
偏屈床屋バリカンに凝り　子
ドラ息子サーフィン狂で職もなし　敏
亀の産卵映すT・V　子
気もそぞろあれもこれもと旅鞄　敏
はじめてのキス落とす冬帽　子
寒の月抱擁の間は隠れてよ　ゑ
ピーポーピーポ救急車行く　え
ゴルビーが涙ぐみたるノーベル賞　子
霞む山辺に放牧の牛　敏
正客の席迄届く花吹雪　ゑ
仁清茶碗「蝶」を拝見

## アラカルト・知司

下鉢　清子

第十回芭蕉忌正式俳諧興行の〝知司〟をとのお電話を頂きましたのは七月末、頼まれた事は前後の見境なく何でも抱え込んでしまう性分、それも私ごときに物を頼まれるのは、それなりの本家の事情もある事と、相手の立場を考えて過ぎて来たのも生きる知恵と言うものでしょうか。今回は加えて大車輪であった「万蕾」二百号記念号の、目鼻もすっかり付いて肩の荷が下りていた安堵が、二つ返事で承諾をしていました。

今までは、芭蕉記念館と亀戸天神藤祭に、年二回の正式俳諧興行に連衆の一人として加えさせて頂き、華麗なる絵巻を拝見するばかりで、深くは考えていませんでしたが、電話を置くと心配になり、一体〝知司〟とは何ぞやと、家中の大小辞典を調べてみると出て居りません。文献中心主義の私は大層不安に。伺ってみますと〝知司〟とは正式俳諧興行全般に気配りをし、段取り良く運ぶ大切な役である由、気軽にお受けして申訳ないことでございます。

九月半ばに光が丘近隣センターで割り稽古、隆秀さんの滞りの無い執筆振りに、感心しているうちに、私め、挨拶のタイミングを外してしまい、前回の知司好敏さんが噛んで含めるようにご注意下さる。

忽ちのうちに本番当日の十月十七日、「只今より第十回……」はて、この次は時雨忌と言うべきか芭蕉忌と言うべきか、暗記をしたつもりの言葉が湧いて来ない、下目遣いに膝前の台本をと見ると、これは後ろに置かれているのでした。余裕が生まれたのは、宗匠秋元正江先生、脇宗匠式田和子先生、副宗匠豊田好敏先生と次々にお呼びして席入りの終わった後のこと、全身に汗が噴き出して、仕掛け無しでも水芸が勤まるのではないかと。（少しオーバーですか。）

執筆の仙台平の袴が、絹擦れの音も爽やかに眼前を過ぎて、所作まことに水際立った文台捌となりました。

世阿弥の『風姿花伝』に「時の間にも男時、女時とてあるべし」とありますが、世は女時に移行しつつあり、即ち芸の魅力である「花」が求められる時代となって来ていると思います。世阿弥が求めた究極の美

の世界は、各人が磨き上げた個性の美の魅力であろうと解するとき、この正式俳諧の型は俳諧に於ける究極の美、理屈抜きで心引かれる「花」の正体でしょうか。

「歌膝になったら清子さんの顔を真っ直ぐに見るから、視線があったらそれから次の言葉を言うのですよ。」

は、割稽古の折の隆秀執筆のご注意。同性とも視線を合わせるのを好まない私が、まして異性とは、この方が至難の技ではないでしょうか。まして花眼とみに進んで眼鏡越しでも遠近覚束無い私の視線、しかし、随分と遠方の座に構えられた執筆と朧な私の目が幸いして、視線が合ったつもり、

「以上でめでたく執筆の文台捌きが終わりました。これよりいよいよ俳諧興行…」

上州生まれの私は、べーべー言葉ならばすらすらと、難なく続けられますのに、斯くの如き標準語的日本語の連続は大の苦手ながら、無事大役を勤めさせて頂きました。

長い年月に亘って洗練され尽された俳諧の作法は、高い教養を加味しつつ、女時(めどき)の「美の世界」「花の世界」を綴るであろうと思いつつ、〝知司〟を学ぶ機会を与えて下さった明雅先生にお礼申し上げます。

## 花司役を勤めて

原田　千町

この度、俳諧芭蕉忌の花司役を勤めさせていただきました。今までに配硯役は幾度かさせていただきましたが、始めて花司役をおおせつかり、正直のところ慌てました。私は花は駄目で、とご遠慮申し上げたのですが本気にしていただけず、それはどなたもお花のお免状の一枚程はお持ちなのが常識、家の中に花を絶やさぬよう心がけておりますものの、生け花の域には程遠く、全くの自己流、娘時代に人並みの稽古をしておりましたらよろしかったのですが、その当時は枝を矯めたりします事に些か抵抗があったりしまして殆ど習わなかったも同然、姉の方は好きで現在まで続けておりますが在米中で教わる訳にも参りません。今さらの後悔先に立たずで、知人を尋ねたりしまして俄か入門となりました。前回にこのお役をなさった山崎一恵様から一式をお受けしまして、この花器での投入花だけをお教え戴きたい、と誠に我が儘な注文をいたします新弟子を快く受け入れて下さる先生に幸いめぐりあえました。

当日は朝の内に先生のお宅へ伺いますといっぱいに紅葉した満天星躑躅が置かれ、その中からあまり丈も高くなく、枝振りの面白い、また花台に乗せて収まりのよい枝を取っていただきました。ほかは竜胆に鳥兜に小菊、竜胆は近ごろのものは、あまりに真っすぐでびっしり花をつけ風情が少ない様ですので、鳥兜の紫と花姿の良さを選んで小菊をあしらうことになり、いずれも具合良く器に止まってくれますので、どうやら自信をつけて御席に臨みました。執筆の隣、花司の座につき、いよいよ正式俳諧の開始、席入り、配硯がなされ、宗匠正江様の凛としたお声が「献花」とひびきまして席の中央に進み出ます。考えますと四方を猫蓑諸兄姉に囲まれそこで花を生けますとは晴れがましいことで、ただ皆様の前で手順を間違えず付け焼き刃の襤褸を出さずに、芭蕉様へ花を捧げられればと思うばかりでございました。どうやら無事にお役を果たし席に戻りましたら、急に動悸のはげしさに気づき隆秀様執筆の見事な文台捌はほとんど夢心地で拝見していた次第です。

# 蓑虫

付勝練習二十韻

東　明雅

投句締切
1月20日

十二句目　客待つ暖炉あかあかと燃え　達子
十三句目　据ゑ膳は食はぬと言った嘘もばれ　志げ子
十四句目
治定　電算三課セクハラの罠　藍
1　虫も殺さぬ優男なり　美鈴
2　朝帰りなど当然のこと　妙子
3　不作一生不立後悔　弘次
4　後は野となれ恋は盲目　治子
5　ケセラセラなるやうになれ　美幸
6　少しきまりが悪い産院　鋭太郎
7　「死ぬ程好き」の相手日替り　雅代
8　女難・金難・宰相の椅子　麻子
9　かかあ天下で万事円満　よしえ
10　蓋を開ければ婆とコブ付き　淳子
11　三界にいま男家なし　美和
12　パンツ論争知るや知らずや　達子
13　女となりてよりの饒舌　慶子
14　還暦すぎの浮気いたまし　敬子
15　忍ぶ恋路にふと思ひ草　均
16　一生不犯が聞いて呆れる

※刻に詠むのは自然であるけれども、それだけでは単調に陥りかねないからである。ところで、今回の場合は、すでに前句に十分の卑俗性、滑稽性がある。だから、次の付句は、ことさらに卑俗・滑稽を必要とはしないであろう。

雅なるものの中の雅を詠んで人に感動を与えるものが和歌ならば、俗なものの中に雅を発見するのが俳諧であり、俗なものの中に俗を求めておもしろさを求めるのが川柳である。前句の俗の中に、何か俗ならざるものを発見し、とらえて付句をし、前句・付句の間に人生のあわれ・さび・しをりを描くのが連句である。

そのような考えに立てば、14などは老いらくの恋の悲惨さを詠ってあわれがあるけれども、一句がやや説明的である。15は和歌調で、ちょっと古いのではなかろうか。16・17・18はそれぞれふざけた調子で、前句とあわせて、これこそ川柳の世界であろう。19は新しい時事の句として、また人名を出したところに魅力があったが、これも要するに軽い川柳の題材である。20は前句の人の「其人」の付けで、付き過ぎる程よく付いているけれども、一句の表現までが真面目すぎておもしろくもおかしくもない。この点1も同様である。2は嘘がばれて据ゑ膳を食ったのだから、朝帰りは当然だということになるとやや理屈めきはしないか。3据ゑ膳を食ったため一生不作の女房を持ち後悔している意としては、何か表現が不十分である。4「言い習わしに又言い習わしの付けはいかがか」という御質問であったが、それは構わないけれども、同じことなら5の方が近代的で

17　とんだ茶番の与三郎なり
18　私としたことがお粗末
19　聖子に通ふ金髪の情人（いろ）
20　平素は真面目一方の人

この巻、ナオの初めあたりまでは割合におとなしい句が続いていたが、前句がちょっと悪どい句であったため、ここで一波瀾が起った。「据ゑ膳」とは卑俗な言葉である。しかし、女性が万事積極的になった当世では、このような現象は随分と増えて来たことだろうし、その意味で、これからの恋句にも屢々現われるだろう。「据ゑ膳」はその意味では、死語ではなく、ちゃんと現代に生きている言葉である。近頃、映画の影響で「アゲマン」という言葉が流行し、連句でも時々使った例を見る。「据ゑ膳」も「アゲマン」も川柳に使われたら最も効果的な言葉であろう。もし、連句の中に用いても、初折に出すのはちょっとはばかられる。この巻でも、初折にはやさしい夫婦愛が唱われた。だから初折の恋とは一味ちがったものを出したいと思う。

さて、先師芦丈先生はつねづね、「恋の二句目で笑わせる」ということを教えられた。元来、恋句は一句で捨てず、二句は必ず続けることになっているが、その際、その二句目にはすこし滑稽なことを言って、読む人を笑わせるというのは、恋句は元来最も痛切・深刻なものゆえ、そのようなものばかりだと、必ず恋句で一巻全体が重くなり、軽みがなくなるのを恐れたためであろう。恋を美しく詠むのはもともと和歌の伝統である。俳諧でも恋は美的に、深※おもしろいと思う。6もおもしろいがやや理屈であろう。7はよい付句である。据ゑ膳を食うような人によくある性格で、次から次への浮気沙汰、それは怪しからぬと非難もできるが、その浮気の性が本人が生れ持った業だと考えると、どうにもならぬあわれさがある。おかしくて同時にかなしい人間の姿をよく見ているし、表現も軽くてよい。8前に何とかという総理が居ましたね。あの人も滑稽で可愛そうでしたね。9これは3とは逆で、据ゑ膳を肯定し、あげくは夫婦円満というわけですね。確かにこんな付け方もありますね。10これもおもしろい。自他半ですね。11情ない。こんな世の中に誰がしたのか。12これも情ない。女性が強い世の中ですね。13女が饒舌なため秘密がばれたという付け方は近すぎるようですね。

さて治定の句、「初ウの恋がなごやかでクラシックムード。また打越の暖炉もあたたかに燃えているので、思いきって憎ったらしい現代の恋の末路にしてみました。OLの据え膳ほどこわいものはありません。そして女は若くてきれいなとき最も酷薄。電算部にはキーパンチャーがたくさんいます」と言うハガキの通り、現代社会の一面を鋭く描いたこの句には迫力があり、事象そのものには男女の運命を語るあわれがある。従ってこの句を採用した。人情他の句。前句は自他半。

次の十五句目。もう恋句はよろしいでしょう。雑でそろそろ外に出てもよいと思います。

# 第5回国民文化祭に参加して

秋元正江

伊予の秋たけなわの平成二年十月二十日、国民文化祭の新規分野に「連句」が正式種目として採用され、その実作会場には、皇太子殿下をお迎えするという光栄ある連句大会となりました。

応吟七三九巻、応募は全国都道府県二六県の広範囲に及び、大会参加申込者は三〇〇名を越し、当日の会席数は四二席、会席名は愛媛県の各市長村に自生している樹木の名を採用、特産の伊予絣の藍染めに木の名を染めた袱紗の会席飾り、この藍色は、どんなに連衆の心を深めてくれたかわかりません。

各捌きの席は一期一会の精神によって、初めてお会いする方が殆んど。表六句を終るころは何となく気ごころもわかって、恋句では短冊を沢山頂き、じっくり楽しむ余裕もできました。この時、皇太子様がにこやかにお見えになられたのです。連句実作の場にお立ちになられる、一瞬夢のような十数分が経って、お送りする拍手が静かに湧き上りました。半歌仙の実作が終ってから、玄関前で全員記念撮影、二台のカメラをつないで脚立に上った写真屋さんは皆の顔を収めるのに大童、正午の秋の陽を充分に浴びながら、子規記念博物館で連句が催されたという時代の流れに感無量でした。

午後からは、愛媛県知事、松山市長、連句協会会長挨拶、暉峻康隆先生の「連句の来し方ゆく末」の記念講演、入選者発表、ついで表彰式、審査講評と進み、この度の応募の半歌仙の形式を「愛媛」と命名したいとの大会提案に全員拍手、次回開催県「ちば」の今泉宇涯先生のユーモアで熱っぽいご挨拶、地元から「おとうさん」の声援のなか、鈴木春山洞先生の閉会の辞は、国民文化祭運動に四年の歳月を過ごされた凛としたお声に、大会の責任を見事果された美しいお姿がありました。

会場に迎えにきたトサデンのバスで一行は今宵の宿の面河（おもご）へ出発、面河渓谷は石鎚山に源を発する面河川の上流にある紅葉の名所で、道幅の都合で途中宿の迎えの車に乗りかえトンネルをくぐって着いた山の宿はぐっと気温も下っていました。しかし、夕食後には四席の二十韻に、渕の瀬音も高まったのです。旅の三日目も快晴、車は土佐路へ、和紙会館、横浪スカイライン（残酷焼の昼食）仁淀川大橋から桂浜、闘犬センター、高知城、日曜市、五台山竹林寺へ文殊堂に手を合わせた頃は刻々と秋の日が昏れてきました。全員無事に全日空の高知発の最終便のシートベルトを締めると、松山城、道後温泉、石手寺、そして月は桂浜恋は、はりまや橋、花は子規記念博物館の連句大会と、伊予から土佐路の秋の空と海の青さを堪能した旅でした。

文部大臣賞、愛媛県知事賞、松山市教育委員会教育長賞、連句協会会長賞、特選六巻、優秀九巻、佳作十五巻、が猫蓑関係で頂いてきた賞です。

# 菊日和

東　明雅　捌

俳諧の大橋架り菊日和　東　明雅
明らけくこそ今宵待つ月　村川　雅子
新走りさしつさされつきりもなし　副島　久美子
廊下をのそり黒猫の過ぐ　安江　真砂女
懸声の鋭くひびく寒稽古　中出　夢女
粉雪ちらちら屋台鍋焼　谷田　男児
四ＤＫ郊外団地広々と　倉本　淑女
急ぐ原稿送るファックス　久
愛媛県何と横長旅疲れ　真
藍染帽子よく似合ふ女　男
有髪の僧は邪念を押へかね　真
厨のぞくは化けし河童か　明
山脈の月にくっきり路地将棋　夢
夢の世に住み七十を越え　男
都議選挙「赤旗」売りがベル鳴らす　久
小綬鶏が鳴くちょっとこいこい　淑
花ふぶき歴史を残す石畳　雅
復活祭のガールスカウト　淑

# さはやかや

秋元　正江　捌

さはやかや猫のならんで子規のくに　秋元　正江
銅板あをき湯屋の初月　松本　碧
重陽の蒔絵の膳を持ち出して　福田　太ろう
シャッターチャンス幼児を撮る　半野　月子
桑枯れし畦に遠嶺の近づきぬ　太
競歩のひとのすこし着ぶくれ　宮内　むさし
わが思ひ秘めたるままに脈をとり　月
ベッドのマナー母娘よく似る　碧
石積みに改修なりし小田の川　む
都会の雀と違ふすずめよ　碧
スナックの軍歌で終はるはしご酒　太
グミキャンデーをくちゃくちゃと噛む　月
夏月に巨きなわらぢ仁王門　む
足長かれと触る手の群れ　碧
フセインの髭ゆれやまず危機続く　太
老いも若きもかげろふの句座　碧
谿深く妖しさに似て花ふぶき　太
苞の鰆のおもき帰り路　む

# 出来秋や

式田　和子　捌

出来秋や伊予松山の連句会　式田　和子
海を遥かに高楼の月　福田　芙紗
茸の香に心安まる厨にて　山田　章子
窓に誘ふ子おさげ髪結ひ　木村　仁美
きらきらと雨滴宿らせ寒雀　早田　順子
スキー靴下安売りで買ふ　美
ジェット機の団体旅行贈られし　紗
ひとの噂は知って見ぬふり　章
鬼となるからくり人形つぎは美女　美
聟に聟きて百年の家　和
数々のバイオ野菜を考へて　順
失敗もまた成功の神　紗
硯海に涼しき月の光こぼれ　美
小箱にしまふ蝉のぬけがら　章
パレードのけたたましさに夢の覚め　紗
空へ風船割れる薬玉　順
醍醐寺の花ふりかかる老ふたり　章
若鮎焼いて交す盃　順

# 山粧ふ

下鉢　清子　捌

俳諧や石鎚山も粧ひぬ　下鉢　清子
月を浮べて曲る小ながれ　佐古　英子
いも版に爽と言ふ字を彫るならん　梅田　利子
声高らかに児等のコーラス　大沼　節子
凍て空へ悠々画くとんびの輪　新海　左人
到来物で牡蛎飯を炊く　英
ゴルビーはノーベル平和賞を受け　清
二つ返事の電話短く　人
あれこれと婚礼衣裳夢に見て　利
やもめ男がちょっかいを出す　節
おっとっとずっこけ神輿に上る月　清
垣根に懸る蛇の脱殻　節
自衛隊派遣・派兵と難渋し　人
漢方薬で癒すキャンサー　英
人生は馬々虎々中国風　利
北窓開く蔵のある家　英
花守の三代継ぎて今日の花　利
散歩はいつも蝶といっしょで　人

# 秋うらら

杉内　徒司　捌

松山に集ふ騒人秋うらら　杉内　徒司
後の月みる寂し城門　阿部　朝子
藤の実にからから風の乾びゐて　戒能　多喜
車窓につゞく黄金なる波　井出重　陽子
釣舟のすべるが如く島の沖　西原　李花
年甲斐もなく買ひし羽子板　喜
熱燗に父娘揃ふて軽く酔ひ　朝
プリンスの恋待ち望む日々　同
あのひとよりもっと佳い人いるかしら　司
庚申塚に小石供へる　朝
ニューヨークから帰国故郷の市長たり　花
広き河原に遊ぶ白鷺　喜
病室の玻璃戸やさしき夏の月　花
「肉弾」櫻井忠温の作　司
豆大福きんつばおやきねぢり飴　朝
鐘の音ひびく長閑なる午后　喜
何も彼も忘れて花を浴びし丘　同
競ひて揚げる手作りの凧　花

# 秋の夜

中島　啓世　捌

秋の夜や子規とひょっこり出会へたら　小林　しげと
さもなきさまにかかる望月　宮内　竹仙
ころころと零餘子厨に煎られゐて　内田　麻子
宅急便で猫送り来る　小川　賢治
冬景色川一筋の光りつつ　田神　三秋
山はしろがね降りつみし雪　門田　久亥
信州にオリンピックは来るのやら　子
ライバル多き夢を見るなり　秋
要らぬこと言うて呉れるな熱い仲　仙
今が良ければ灰となるまで　子
きな臭ひ匂ひただよふ派兵論　仙
バトントゥワラー赤いスカート　子
島影のも早昏れゐて月涼し　治
秘蔵の梅酒ほろと酔ひたる　秋
とつ国の土産はみんな免税品　亥
まだととのはぬ鶯の声　中島　啓世　子
花盛り等々力不動さんざめく　仙
句帳片手にうららかな旅

# 早生蜜柑

原田　千町　捌

海よりの風こころ好や早生蜜柑　原田千町
昼月仄と浮ぶ城山　笠間文子
新走り小ぶりの椀に酌みあひて　中川哲
呼べば尾を振り返事する犬　若松照代
泥んこの腕白坊や隣から　菅伸太郎
フレームは香と色にあふれる　照
冬の蠅生命の果ての厨窓　哲
拾った財布なかは空っぽ　同
我が儘な彼女十代ポップ歌手　照
秘めて告げ得ぬ未練愛着　伸
希臘神話恋絢爛と繰り広げ　文
滝より出て岩に凭る人　伸
ナイターの放送聴きつ望くだり　同
円高をうけ空港の混む　照
変はりゆく世を若き等に夢託し　文
遠く近くに鶯の声　町
隧道の先は湯の街花吹雪　照
宴の後の淡き春愁　哲

# 秋うららら

東　郁子　捌

秋うららら集ふ白亜の城の下　東郁子
昼月淡く色変へぬ松　宇都宮柏葉
風炉名残幼も膝に手を置きて　上月淳子
甘味ほどよき干菓子いろいろ　中川久子
美しきヴィオロンの音に惹かれつつ　瀧川雅代
端居の人の詩集繙く　麻生禎子
潮の香の涼し岬の弁財天　久
オープンカーのスピードを上げ　雅
マンションを一軒買ったと軽く言ひ　淳
座敷わらしの笑ひ声聞く　柏
山深くむささび寺に凍つる月　久
根雪の弛み初めし南北　禎
無理強ひに口移し酒呑まされて　淳
略奪婚と自慢するパパ　雅
古稀過ぎて一期一会を大切に　郁
地虫穴出づ日の当る庭　淳
外人も混るマラソン花ふぶき　柏
若芝の上ひらくおむすび　禎

# 秋の潮

福井　隆秀　捌

四国より瀬戸内かけて秋の潮　福井隆秀
ぽんぽん船についてくる月　友永幹子
栗拾ひ母子競ひの声あげて　黒田よ子
テレビ頼りの料理番組　草木原エ
山住ひ陶器作りに寒見舞　浅井園丁
微塵に群れて綿虫の庭　田中恒子
押売りの口調やさしく目のきつく　幹
色づきにけり心さわぎに　丁
きぬぎぬにいかにとやせんキスの痕跡　エ
いまさらあとに引けぬフセイン　よ
古籬門までの道大師寺　エ
水蜜桃の雫したたり　よ
月涼し清貧なれど不足なき　丁
毎夜毎夜のロック音楽　幹
飼主によく似た犬に吠えられて　恒
春の背広とぴかぴかの靴　幹
拓本を取りに旅路の花の下　エ
句を案じつつ聞ける囀り　恒

# 第二回全国連句新庄大会

平成二年九月十四日（金）・十五日（土）
山形県新庄市／新庄市民プラザ

久々の大型台風接近の報を背中に聞きながら、九月十四日、東明雅先生奥様とも猫蓑総勢八人は、第二回全国連句新庄大会に参加致しました。その朝は晴でした。

会場の市民プラザは昨年の大会のとき、芭蕉の句碑の除幕式のあった所で、そのときはまだ完成していなかったと思いました。句碑は街によく馴染み風格さえ持って私どもを迎えてくれました。連衆は各地から参加された方と、地元北陽社の方で六十名余り。午後一時三十分から市長、教育長の挨拶があり、続いて表六句募吟表彰。猫蓑からは原田千町さんが受賞されました。記念撮影後、十席に分れて連句興行に入りました。

実は、前回捌かなかった人ということで、当日到着受付で頂いた席組表に杉亭さん、和子。また遅参の方が到着されるまで正江さんが捌きを承り、開催を待つ間のんびりとお茶を、どころでなくなり発句！発句！。

この大会の中心になっていらっしゃる北陽社は男性連衆が多く、私の席も皆様男性。初対面のことではあり、作品形式は自由ということなので時間の関係で二十韻を選びましたが、連衆にはご存知ない形式のことと　その由お詫びし、説明しながら進行することに致しました。都心連句会の小林しげと氏に助けて戴きながらも、一巡まではどうなることかと思いましたが、お酒が入ってからは、「北陽社ではこういう考え方をします」というような卒直なご意見も戴けまして、「これならいかがですか」と確めつつ進め、途中献身的なお世話をしてくださった新庄市史編さん室の今川いねさんも瑞々しい一句をおつけくださり、北猫二十韻一巻時間内に無事首尾することができ、何よりの記念となりました。

やがて夜来の雨となり、翌日の史蹟めぐりはバスの中からとなりましたが、宿泊の鮭川羽根沢温泉の由来の鮭簗の仕掛け等、民話を聞くようなご説明が印象深く、新庄の皆様のお心入れの程が痛いほど伝わりました。有難うございました。

皆様、また来年新庄へまいりましょうよ。

（文・式田和子）

## 二十韻　良夜

式田和子　捌

新庄の良夜待つらん句座の友　式田和子
虫の音色も澄み渡る頃　浅沼栄太郎
秋の海大漁船の入り来て　高山三智雄
徒手体操の子等が散らばる　小林しげと
軒先に尼の小さき足袋干され　影沢与六
納豆好きに納豆を打つ　と
離れても電話のベルが気にかかり　雄
同窓会の甘きカップル　郎
彫り跡を残し見上ぐるほどの樹に　今川いね
終の棲家の倉に夕立　と
湯あがりの五臓にビール泌み渡り　雄
六腑のつぼに鍼を打つ婆　六
牛肉を買っても米は買はぬてふ　同
昏くなったら怖いものなし　と
残業の戻り雪女郎佇ちて月　雄
よりつもたれつつねりつねられ　六
この節は無芸の出店ばかりにて　郎
御開帳にはかかさずに行く　と
花追うて車窓に出羽の富士仰ぎ　郎
日向の渓を渡る鶯　雄

## 歌仙　薄紅葉

杉内徒司 捌

新幹線乗換へしより薄紅葉　杉内徒司
畳む山々仰ぐ昼月　東郁子
谷底に法師蝉など声もして　笹白舟
過疎の家路を急ぐ口笛　荒木清玉
曲家を観光の具に村おこし　村松風郁
新しき句碑涼やかに建つ　郁
風鈴（ウ）も鳴れる出店の心太　舟
入墨凄き兄ちゃんも居る　風
老いらくに恥ぢずひたすら恋に酔ふ　玉
合はぬ辻褄合はす言訳　郁
助六は江戸っ子ならぬ新庄っ子　司
まんまと狸のせし泥舟　風
白壁を皎々として寒の月　玉
下りればきしむ古りし階段　司
酒癖の悪い親父も人の親　舟
蔵書と云へど文庫本のみ　司
結願寺遍路と共にくぐる花　郁
西も東も長閑なる春　玉

お目当（ナオ）のコアラ日永を眠りこけ　郁
待つ身はつらし顎鬚を抜く　司
村芝居失笑さそふラブシーン　同
本性かくし娘の袖を引き　風
八向山（やむかやま）右手に舟出の芭蕉曽良　舟
時鳥聞く遠く近くに　郁
涙して球児砂採る雲の峰　司
堅固な城も蟻の一穴　風
かりそめの痛み整骨院通ひ　郁
いただきもののぼた餅を喰ふ　風
魚偏の文字で飾りし鮨茶碗　司
還り待ってる北方の月　風
露（ナウ）の径踏み踏み祈る屋敷神　
新酒の小さき樽を求める　司
勲章を後生大事と仕舞置く　玉
子孫に伝ふ紬織る技　風
嫁姑連立つ城趾花ざかり　郁
隠明寺凧揚がる中空　舟

## 二十韻　竹の春

杉江杉亭 捌

再会の芭蕉の句碑や竹の春　杉江杉亭
大戸くぐりて仰ぐ三日月　斉藤孤柳
文机に秋灯低く夜も更けて　小林文夫
ピアノの上にうづくまる猫　門脇正
障害（ウ）にめげず頂く茂吉賞　富沢久子
よくぞここまで妻の付ききし　夫
二の腕に命の文字を彫りこんで　柳
角乗りをする沖仲仕をり　亭
葉柳に風流れゆく川豊か　柳
葭簀の隅に積みし空瓶　亭
ウィンク（ナオ）の忘れられない片笑窪　柳
ナナハン飛ばす腰に抱きつき　正
新開地赤い帽子のお地蔵様　子
兎追はれて暮るる山里　正
母上の面影偲ぶ冬の月　子
孫の仕草のいつか似てくる　夫
受け継（ナウ）ぎて五代続きし登窯　正
地蟲穴出であたりきょろきょろ　夫
鳥越の鎮守の宮に花吹雪　亭
般若の絵凧揚げる子供等　子

## ◇朝日カルチャーセンター連句教室

### 二十韻 ひこばえや 秋元正江捌

ひこばえや西新宿のあたらしき　正江
上衣片手に春闌くる頃　淳子
栄螺沸く膳に話のはづむらむ　淑子
消さぬテレビを犬が見てゐる　弘子
月面に神の名のつくクレーター　千町
にきびづらには糸瓜水あり　志げ子
歩哨兵待つは恋文雁渡る　健悟
裏道つたふ難民の群　徒司
ジプシーにまじりて踊るフラメンコ　雅代
マジョルカ壷に大き薔薇挿し　啓世
日覆のほてり残して畳まれぬ　和子
朽ちし釣具屋堀にゆらゆら　澄子
ふたむかし過ぎて腕白父となり　啓子
雪山にまた逢ひし嬉しさ　潤子
酌み交す寝酒の果の歪む月　明雅
三尸の虫のついと抜け出す　達子
いつの間に寺宝となりし石瓦　文子
村起し策知恵をしぼって　利子
SLをねらふカメラも花の蔭　冬乃
弥生の空に泛かぶわた雲　一恵

平成二年四月十一日　起首
平成二年九月十二日　満尾

### 歌仙 秋風

碑や秋風の生む山の音　房利
月見団子を腰にさげゆく　正江
籠盛りの榻櫨の一顆頂きて　元子
絞りと刺繍Tシャツの柄　利子
ギャマンの煙管を買って吹いてみる　一恵
みどり蜘蛛追ひつまみあげる子　澄子
隈田川新大橋にほど近く　雅代
「園女の世界」授賞うれしき　利
陰になり日向となりて妻を立て　同
猫と思って撫でてやるなり　江
本性をむき出しイラク暴走す　恵
メッカの壁に何を祈らむ　利
中天の月仰ぎつつ掃納　元
昆布たっぷり湯豆腐の鍋　同
せがまれしジグソーパズルつながらず　澄
ほろほろ鳥に声をかけをり　江
我が庭に植ゑてはじまる花行脚　利
若狭あたりのよな曇りして　元

瀧川　雅代　捌

常節のひたと貼りつく生簀籠　澄
自販機故障ゆすっても出ず　江
ダイエットききめありしか大元気　澄
ゴリラがじっとひとを眺める　恵
噴水に銀の妖精踊りつつ　元
古城に弾ける若き楽聖　澄
結び文わざと落して拾はせむ　利
奪ひ取るのよそんな好きなら　同
海鳴りの遠く聞ゆる岬にて　元
画架をしまひて老のくりごと　江
初月夜詩心おのづとあふれ来ぬ　恵
蟻穴に入る野佛の裾　江
どびろくの酔に無頼の地下酒場　澄
戦後育ちが六割を占め　恵
いっせいにスクランブルの交叉点　江
電話ボックス待たされてゐる　恵
花の雨胴着かつぎて女の子　代
今年も届く鯛の浜焼　元

平成二年八月二十日　首尾
於　深川芭蕉記念館

## ◇電通連句部

### 二十韻長き夜　東　明雅捌

長き夜を季寄せ片手に集ひけり　秀樹
　颱風一過蒼き月の出　碧
七輪で焙る松茸匂ひ来て　茂
　田舎を持てる者の幸せ　美恵
船遊(ウ)びえいやえいやと声揃へ　明雅
　しぶきちらして富士垢離の人　英子
のら猫も通ひなれたる家があり　秀
　恋も仕事も酒にまぎらす　憲助
ワープロのディスクに残す胸の中　同
　東北訛り少し混りて　恵
土門(ナオ)挙写せし寺に冬の月　英
　おでん頬張る湯豆腐のあと　茂
おちょぼ口赤きルージュを引き直し　碧
　若い男を三四人飼ひ　秀
東京と巴里倫敦紐育　同
　世界で祝ふモーツァルト祭　英
旅の宿(ナウ)寝覚めの床に鳥が鳴き　秀
　風光る朝登校の列　茂
城山に残る偉人の花の道　雅
　枝から枝へ白蝶の舞ふ　碧

平成二年九月二十七日
於　電通南寮

### 歌仙　挙母てふ

挙母てふ町にも寄りたし夏帽子　一與
　郭公の呼ぶ青き山並　藍
噴水のひとつひとつに芸ありて　與
　セーラー服のコーヒーショップ　與
夕月はルビーの車に乗って出る　藍
　秋灯のもとねむる肥え猫　藍
自然(ウ)薯の掘れたじまんの宴なかば　同
　逢ひてもあはで荻風を聞く　與
こひしさにまけてしまってくるしくて　藍
　手鞠転がりゆく歓喜坂　與
廃屋の遊廓ひそと雨の中　藍
　副都心案予算たっぷり　與
和を以て貴しを常に強ひらるる　藍
　冬三日月で人を刺したし　與
透明な血がするするとエイリアン　藍
　アールヌーヴォーの首長き瓶　與
花かざし花散乱のさんざめき　藍
　都踊の囃のびやか　與

### ファックス文韻　清水　一與　矢崎　藍

哀愁(ナオ)を払って蝶の舞ひ上がる　與
　北のさいはて研究所住み　藍
余技なれどバッハの弾き手と世に知られ　與
　老父に承知させた入院　藍
天使とも呼ばるる魚の横しまな　與
　シャネル五番を着てをりますわ　藍
そっと来てリッツに部屋を取ったから　與
　遠い汽笛に教会の鐘　藍
要塞を死守した島へ観光団　與
　新聞売りの児のほそき腕　藍
故郷は帰るまじきに月耿々　同
　となりのかかしナウいTシャツ　與
木簡(ナウ)の埋もれし宮居木の葉降る　藍
　藤娘筆と読める掛軸　與
わがままでおきゃんで誇り高きとか　藍
　思ひ通りに染まる藍糸　與
先生の戯れ歌もよき花見酒　同
　流れぬごとく春の大川　藍

平成二年七月十四日　起首
同　七月二十八日　満尾

# 百萬のこと

佐藤廣幸

『芭蕉七部集』の第三集「阿羅野」に収める、越人と傘下の両吟歌仙「月に柄を」の巻に、百萬のことを詠んだ、次の付合が出ている。

皆同音に申す念佛　　越人
百萬も狂ひ所よ花の春　　傘下

この付合は「百萬」についての知識がなければ何を詠んだのか、その意味を汲みとることはむずかしい。ところが、謡曲に関する知識を持つ人ならば、大低の人はこの付合の意味を何んの解説もなく理解できよう。近世の庶民の多くは、謡曲から古典的知識や教養を得ていた。

「謡曲は俳諧の源氏」という言葉がある。これは中世の連歌では『源氏物語』を踏えた句が多いが、近世の俳諧では『謡曲』に基づく句が多いので、連歌においては原典の『源氏物語』を、俳諧においては、『謡曲』の詞章に関する知識が必要であることを説いた言葉である。

譬えば、『おくの細道』の旅で、芭蕉が加賀の小松の多田神社で、平家の老将齋藤実盛の遺品のかぶとを拝観して「むざんやな甲の下のきりぎりす」と詠んだ句を作った。謡曲『実盛』の詞章を踏えてできた句である。木曽義仲との合戦で、老いの身を侮られまいとして、白髪を染めて出陣し、壮烈な討死をとげた実盛の首実検をした、義仲の家来樋口次郎が、「あなむざんやな、齋藤別当にて候ひけるぞ」と、首を洗ったので白髪頭になり、義仲が幼いころ恩をうけた人であることを想い感涙にむせんだという謡曲の詞を用いてつくった句である。俳句（発句）においてもそうであるように、連句においても謡曲からの影響をうけることが多かった。この『阿羅野』の百萬の付合も、謡曲『百萬』のことを踏えた付合である。従って謡曲『百萬』の知識があればその意味も簡単に理解できるが、そうでなければ何を言っているのか理解することはむずかしい。「皆同音に申す念佛」という越人の前句を、花の咲く春の洛西の嵯峨の清涼寺における大念佛会の大合唱とみて、幼くして見失ったわが児の姿を求めて、春の念佛会の大合唱をバックに、我が児恋しやと狂い出た百萬の姿を春光の中にとらえた付句である。

『阿羅野』ができた元禄二年の同じ年、芭蕉も一座してつくった歌仙（三十六句の連句）「水仙は」の巻にも、百萬のことが詠まれている次の付合がある。

彼岸にいると鐘聞ゆなり　　亀仙
ゆき違ふ中に我子に似たるなし　李沓

この付句には、百萬という名は句の表に出してはいないが、この付句は謡曲『百萬』によっていることは明白である。亀仙の前句は春のお彼岸に寺々からうち鳴らす鐘の音がなり響いて、この世を極楽浄土と化するような叙景の句である。その前句を受けて、鐘の音に誘われるように、彼岸詣りの人出で賑わう境内を、我が児に似たる子はいないかと、血眼になって児を探し求める狂女の哀れな姿を出した起情の句である。謡曲『百萬』には、「あら我が子恋しや、これ程多き人の中に、などや我が子の無きやらん」という詞章があり、これに発想を得た句であることが分かる。俳諧において

は発句はもちろんのこと、連句においても謡曲からの影響は大きかった。ところで、百萬がわが児を人混みの中で見失なった所はどこかと尋ねられると、即答出来る人は余程謡曲に通じた人であろう。私にも答えにくい質問であるが、私は偶然にもその場所が現在の奈良市の西大寺の境内にあることを知る機会に恵まれた。

それは十数年前のある秋の一日、西大寺の寺宝展があって、秘佛の愛染明王が拝観できるというので出かけた。その還り、西大寺の東門に近い四王堂前の池畔で偶然にも、「百萬の古柳の由来」という掲示板を読んで百萬の子別れのことを知った。

観世流謡曲に百萬（別名嵯峨物狂）と題し、世阿弥元清作とあり。昔、奈良に百萬という女曲舞（一説には春日大社巫女という）在って、我が愛児（男子）を連れ、西大寺念佛に詣でたる時、我が児を見失いしはこの古柳の附近なりと、百萬は佛の加護を念じ、念佛を称えつつ八方我が児を覓（もと）めて徊い遂に狂女となる。しかし、後日嵯峨清涼寺の大念佛会に於て再会することを得て、法力ぞありがたしと愛児諸共都へ帰りたりと、実話か伝説かならざるも雅曲に基きその大略を記し、以って由来書となせるなり。因に愛児は他年名僧となり、十遍上人と号して清涼寺の住僧となりしと記録にも見えたり。右側の碑は此の憐れなる百萬を詠じた詩を勒したるものなり。

真言律宗總本山　西大寺
関西吟詩文化協会　哲菖会

「右側の碑」の詩とは次の漢詩のことである。

覓児念佛果何之　蓬髪狂奔百萬姿
哀話綿綿西大寺　至今柳蔭使人悲
想狂女百萬　八十翁哲菖

（児をもとめ、念佛の果て、何ぞこれ、蓬髪、狂奔す百萬の姿。哀話めんめんとして、西大寺今にいたるも、柳蔭人をして悲しましむ。狂女百萬を想う。八十の翁哲菖。）

百萬が子を探し求め遂には気が狂い、処々方々をさまよい歩き、洛西の嵯峨の清涼寺にたどりつき、遂にそこで我が児とめぐり合った。再会の場所を知る人は多いが、百萬が愛児を見失った場所が南都の西大寺であることまで確かめる人は少ないと思う。念のため謡曲『百萬』に当ってみると、「これにわたり候ふ人は、南都西大寺のあたりにて拾ひ申し候……」とその場所がちゃんと記されている。「西の大寺の柳蔭、みどり子の行くへ白露の、起き別れて、いづちとも知らず失せにけり」と我が子を見失った場所が西大寺の柳のもとであることも語られている。

さて、昔の奈良町の様子を調べる必要があって、西村嘯月の『奈良曝』（貞享四年、一六八七）や、村井古道の『奈良坊目拙解』（享保二十年、一七三五）などの古記録を図書館に行って読んでいると、奈良には当時「百萬辻子町」と呼ぶ狭い横丁があって、そこに百萬が住んでいたという記事があるのを発見した。岩波書店の日本古典文学大系本の謡曲の解説によれば、百萬という女は実在したが、その百萬が子に別れて狂女となったという話の出所は不明であり、これが実話かどうかはっきりしないという。村井古道（奈良市の西城戸町に住み、外科医を開業するかたわら、地誌や俳諧にも造詣が深い人。今日、市内で病院を経営する医師喜多野徳俊先生にはこの古道のことを研究した『無名園古道』という著作がある。古道の墓は、最近になって発見され、今日ナラ・フジタ・ホテルの裏の霊岸院の玄関

わきの庭に移され保存されている）が、数年を費して調査研究した『奈良坊目拙解』には百萬に関する記事が詳細に渉って記されている。喜多野先生の訳文（原文は漢文）により、その主要部分を抄記しておこう。

百万辻子町

今辻子町と林小路との中間で、西照寺前南側に在る。当町家数は纔（わず）かに六宇許りで、世々一町となる。里諺に云う、往昔舞女百万がこの所に居住していたので後の人百万町と名づくと、街路甚だ狭いので、百万辻子町と号した。

元禄二年、奈良町屋寺社改帳に云う。百万辻子町家数六軒、竈員六軒、内大屋三宇、借家三軒云々と。当初春日拝殿の上膳百万女この所に住居、西大寺会式に子を失って狂人となり候う由云い伝えると。百万屋敷が南側に在り、累歳百万屋敷旧跡と号した。近世草庵一宇があって、桑門徒が居り、亦百万石塔一基が庭前坤隅（ひつじさるのすみ）に存す。当屋敷は霊巌院の支配である。

婦人百万は何世の何人と云う事まだ詳らかでない。里諺は春日巫女と称すけれども、いずくの人に嫁したか知らない。一男子が有って幼年の比（ころ）相伴って西大寺法会に詣でた。そして諸人群集の中でその幼児を失った。愁歎の為狂乱となり、後平城京を去って嵯峨清涼寺に漂泊した。遇々（たまたま）大念佛会にて幼児漸く成長して清涼寺の弟子となり、まだ剃髪せずに童形であった。童子は適々（たまたま）狂女を視て、己の慈母である事を告げた。母も亦渠（かれ）の幼貌を忘れず再会を得て、母子供に故京に帰って当所で終った。よって百万屋敷と称した。能芸、謡に百万と謂（い）うのがあるが、その旨趣は百万の事実を述作した。そこで世上はよく百万愛子再遇の故事を知った。けだし嵯峨清涼寺の伝説に云う、百万が失った幼童は後に僧となって、十遍上人と号し、清涼寺一代の住僧で、その母百万婦人の寿像一幅を写図して、今に釈迦堂の什物とすと。（以下略す）

右の文中にある奈良の「今辻子町」、「林小路」、「西照寺」、「霊巌寺」は今日も名がそのまま残り、現存している。なお郷土史家の山田熊夫氏の『奈良町風土記』（昭和五十一年刊）には、百萬の供養塔が西照寺に遺っていることが記されている。右の村井古道の『坊目拙解』に記す「百万石塔一基」というのが現在西照寺に遺る百萬の五輪塔のことと思われるがどうだろうか。百萬辻子町は現存しないが、『坊目拙解』の記述からおおよその位置の見当はつく。

現在ＪＲ奈良駅前を東西に走る通りが、むかしの奈良町より難波へ通ずる奈良街道の発着点で、奈良市最大の賑わいをみせる三條通りである。ＪＲ奈良駅からこの三條通りを東に向かうと道はゆるい坂道となり、猿沢池や興福寺の南円堂や五重塔のある奈良公園に達する。その両側には、奈良漬、奈良墨、奈良筆、奈良団扇その他土産物店や旅館、銀行や商店、飲食店が軒を並べている。その中間の北側に春日率川坂上陵と呼ばれる開化天皇陵があり、店舗の間から狭い参道が拝所へ続いている。現在この参道の東側にそってナラ・フジタ・ホテルが建ち昭和五十八年十月から営業している。私の推測では、御陵の拝所に当る地点がむかし百萬辻子町があった場所ではないかと思われる。それにしても、奈良市の中心街の三條通りの裏に、繁華街のこんな近くに百萬屋敷があったとは全く予想もしていな

かったことが判明した。三條通りから玉砂利を敷いた御陵の参道を北に入って、拝所に佇つと、御陵を正面にして右手（東側）に屋根の見えるのが林小路町の霊巌院で、左手（西側）の御陵の境界線の向うにかすかに窺えるのが、今辻子町の西照寺である。現在は林小路から今辻子町へは御陵の敷地になっているので通り抜けることは出来ないが、明治のころまでは道がついていて東の霊巌院の門前から、西の西照寺の門前まで自由にゆききが出来たそうである。百萬の墓がのこるという西照寺へは、三條通りの北側にある大和茶を売る店舗を北へ入り、今辻子町を右（東）へ入った小路の一番奥に浄土宗の小さい寺がある。それが西照寺である。その門をくぐると直ぐ右手に二メートルほどの高さの古い五輪の塔が御陵との境い近くに安置されている。その塔のかたわらに、「謡曲　百萬之墓」と記された小さな木札がたっている。寺伝では、この五輪塔ははじめ百万辻子の百萬屋敷跡にあったのがいつの頃からか、西照寺の境内に安置されるようになったという。西照寺は現在は、浄土宗の単立寺であるが、はじめは禅照庵という真言律宗の草庵で、西大寺の中興の祖、叡尊が開基した寺であったという。なお『坊目拙解』の著者無名園村井古道（法名古岸道静居士）の墓は現代になって林小路町の浄土宗霊巌院の群集墓の中より発見され、現在同寺の玄関わきの庭の一隅に立派に保存安置されている。

佛縁により、生き別れた親子がめぐり遇うという再会譚は、中世の佛法説話には多かった話のようであるが、これは佛法普及のため諸國をめぐり歩いた遊行聖（ゆぎょうひじり）が、浄財を集めるため、庶民に佛の尊さを説いて廻ったときの説話の一つではなかったかと思われる。日本民俗学の父柳田國男翁の学燈をうけつぎ、中世庶民信仰の調査研究によって佛教民俗学という新分野を開拓した五来重氏によれば、謡曲『百萬』のモデルは中世の遊行聖、円覚十萬上人道御であるという。

（円覚上人は）一遍と同時代の聖（ひじり）であり、すべての点で一遍を上まわる行実をのこしながら、伝説のなかに埋没してしまった遊行者である。彼は幼時に生別した母をさがすために、各地で大衆をあつめる大念佛をもよおしたといわれているが、実際は壬生寺、法金剛院、清涼寺などの再興のために、勧進大念佛を興行したのである。……道行はけっして伝説の人物ではなく、歴とした実在の勧進聖であることは、法隆寺の新堂院棟札に、「勧進聖人円覚」とあるのでもあきらかである。その寿像とおもわれる肖像画（重文）も京都花園の法金剛院にのこっている。その讃や『法金剛院古今伝記』によると、「回國の志を発し」て遊行に出たが、その目的は「浄財を移して廃寺を修し」たり「悲田の貧病を拯（すく）う」ことにあったという。この浄財をあつめる方法が百萬人の融通念佛賦算であって、かれは各地で大念佛をもよおしては集った人々に賦算をおこない、これが十萬人に達するたびごとに盛大な供養大念佛をした。これが十回に及べば百萬人賦算を完成したことになるが、いま十萬人の碑が見出されるのは、清涼寺釈迦堂の裏と、法金剛院の旧寺地、双ケ岡の東麓だけである。しかし壬生寺や、法隆寺にもあったであろうし、奈良元興寺極楽院の僧坊再興にも関係しているから、ここにも見出される可能性がある。（五来重著『佛教と民俗』所収「遊行の宗教」）

右の賦算（ぶさん）というのは、念佛勧進（寄附）をうけた人の数を計算するために、一定数の念佛札（賦算札）を予め刷っておいて、寄付をうけた人ごとにこの賦算札を授受して、その数を満たす方法である。一遍上人もこの賦算札に「南無阿弥陀佛（決定往生六十万人）」と刷っていたので、六十萬人に賦算する目的であったことがわかるという。一遍は示滅するまでの十六年間の遊行で二十五萬一千七百二十四人にこの賦算札をくばることができたという。これをもってしても、百萬人賦算が実に容易でなかったことが知れる。

私は百萬が謡曲の中に採り入れられ、西大寺で見失った我が児に京の清涼寺で再会し、奈良の町に住んだ場所が後世まで伝えられ、遂に百萬の墓といわれる五輪塔までのこっていることまでたどりつくことが出来た。そうして謡曲『百萬』のモデルが実在した円覚十萬上人道御であることも探り得た。こうした過程の中で、私が一番不思議に思ったことは、なぜ中世「百萬」という珍らしい名が曲舞の女の名となったかという理由である。幸田露伴は『評釈曠野』の中で、百萬の名の起りは、「十萬上人の母なれば作者（筆者註―この場合露伴は謡曲『百萬』の作者を世阿弥か又はその父の観阿弥と考えていたのではなかろうか）の設くるところなり」と単純に推測しているが、上述の五来氏説に耳を傾けるならば、これは恐らく、百萬人賦算を行った円覚上人の行実から名付けられた名ではないかと思われる。なぜならば、「百萬」という大きな単位の数字が遠い中世の世に使われていたことは、我々の少年期を顧みても甚だ不審であり、想像の域を絶する、納得しがたいことである。百萬という数字は今日でこそ、我々の日常生活にもしばしば使われそう怪しむに足りないことであるが、我々の生活体験から判断して、中世百萬という大きな単位の数字が使われる社会的領域はそうざらにあることではないように感じられる。極く限られた特殊の社会的領域ということになる。我々が今日考えられるその領域といえばまず佛教界ということになろう。佛教界は莫大な財貨を要する世界である。寺院一つ、御堂一宇にしてもそれを建立するのには莫大な費用を必要とし、零細な寄付人口では十萬、百萬という単位の大きな数字になる。そういう当時の社会的背景を考えると、百萬という名が付けられたこともあながち突飛なこと許りとは考えられない。私はこうして百萬という名が浮び上って来た社会的背景をやっと探り当て、佛教の庶民の寄付により御堂、寺院の修復をつのった聖の母にふさわしい名であることがようやく理解できるように感ぜられてきた。

芭蕉七部集の俳諧に詠まれた百萬の原点は謡曲の『百萬』にあり、その謡曲『百萬』のモデルは中世の遊行聖にあり、百萬の名の起りは、浄財勧進の百萬人賦算にあるらしいことが朧げながらわかってきた。百萬という変った珍らしい名に、中世庶民信仰に支えられた遊行聖の影を見るのは、私の単なる幻想であろうか。識者の教えを仰ぎたい。（完）

## 連句会案内

※連句教室
日　時　第一日曜日　午後一時～五時
会　場　関口芭蕉庵
文京区関口二ノ一一ノ三
（電）九四一－一一四五

※柏連句会
日　時　第二日曜日　午後一時～五時
会　場　光ケ丘近隣センター
（南柏駅よりバス　光ケ丘団地マーケット下車）

※A・C・C連句・理論と実作
日　時　第二・四水曜　午後一時～三時
会　場　新宿住友ビル四十八階
朝日カルチャーセンター
（電）三四四－一九四一（代表）

※猫蓑会（会員制）年四回
（一月・四月・七月・十月　第三水曜日）
会　場　松声閣
文京区新江戸川公園内
（電）九四一－九六四九

〈御注意〉
柏連句会は、従来第三日曜に興行していましたが、昨年六月から第二日曜に変更致しました。（八月は休み）

## 雁帛往来

▽九月二日　関口連句教室出席。本日、電脳連句の林義雄先生初出席。連衆十八名の盛況なり。
▽九月六日　柏連句会、会者十五名。表六句を作る。第六回国民文化祭へ応募のため。
▽九月十二日　A・C・C出講。
▽九月十四日・十五日　新庄市の第二回全国連句新庄大会に出席。杉亭・徒司・正江・和子・千町・清子・郁子同行。北陽社の面々と交歓。鮭川村羽根沢温泉で一泊。
▽九月十九日　南柏光ケ丘近隣センターで正式俳諧下稽古。夜、台風十九号来。
▽九月二十四日　荻窪の四宮連句会に出席。
▽九月二十六日　A・C・C出講。
▽九月二十七日　電通連句部に出席。
▽十月七日　関口連句教室出席。会者十九名、下の椅子席を使って三卓とする。
▽十月十四日　柏連句会出席。
▽十月十七日　深川芭蕉記念館で第十回俳諧芭蕉忌。正式俳諧興行後、七卓に分かれ二十韻興行。本日「ねこみの通信」創刊。
▽十月十九日・二十日・二十一日　第五回国民文化祭連句大会出席のため、猫蓑軍団と一緒に松山市へ行く。松山観光のあと、二十日は子規記念博物館の会場で、四十二席に分かれ半歌仙興行。この間、皇太子殿下の御視察あり。募吟の表彰に猫蓑の入賞多く満足。五時松山をたち面河渓に一泊、翌日、土佐を見て帰京。
▽十月二十四日　A・C・C出席。
▽十月二十五日　電通連句部出席。

**季刊「連句」　第三十一号**
平成二年十二月一日発行
編集人　東　明雅
発行人
季刊「連句」発行所
〒277 柏市つくしが丘二ノ二ノ一二　東方
電話　〇四七一（七五）一一九二
振替口座　東京七－五二一三三
印刷所　株式会社　岩田印刷
〒277 千葉県柏市酒井根六二六－一
電話　〇四七一（七四）〇一八三
定価　一部　五〇〇円　送共
一年　二〇〇〇円　送共

# 連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

連句の実作・鑑賞・研究に必須の知識をすべて網羅！初心者から研究者まで使える本邦初の連句辞典

B6判　三五二頁　三五〇〇円　三版

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである

**収録項目例**

〈用語篇〉挙句　会釈　一座一句　有心　打越　思いなし　表八句　懐紙　歌仙　軽み　切字　景気　五句目　差合　去　式目　四春八木

〈人名篇〉天野雨山　伊藤松宇　上田聴秋　鵜沢四丁　小林見外　下平可都三　関為山　高橋玄一郎　高浜虚子　中村俊定　野村牛耳

---

水原秋桜子編

## 俳句鑑賞辞典　二三〇〇円

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編

## 現代俳句鑑賞辞典　二八〇〇円

結社や傾向にとらわれず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編

## 季語辞典　二八〇〇円

日本の季節にまつわる言葉をスモッグ・不快指数などまで収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修

## 難解季語辞典　四五〇〇円

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

---

国語学大辞典　B5　一九〇〇〇円　国語学会編

国語慣用句大辞典　A5　六八〇〇円　白石大二編

国語慣用句辞典　B6　二二〇〇円　白石大二編

国語史辞典　B6　三五〇〇円　林巨樹他編

日本語　語源辞典　B6　一八〇〇円　堀井令以知編

京都語辞典　B6　一八〇〇円　井之口・堀井編

擬音語擬態語辞典　B6　三五〇〇円　天沼寧編

隠語辞典　B6　三八〇〇円　樋垣実編

近世上方語辞典　A5　一五〇〇円　前田勇編

花柳風俗語辞典　B6　二三〇〇円　藤井宗哲編

明治大正　新語俗語辞典　B6　三八〇〇円　樺島忠夫他編

難訓辞典　B5　二二〇〇円　中山泰昌編

名乗辞典　B6　二八〇〇円　荒木良造編

名数数詞辞典　B6　四五〇〇円　森睦彦編

あいさつ語辞典　B6　二八〇〇円　奥山益朗編

新版　ことば遊び辞典　B6　五八〇〇円　鈴木棠三編

類語辞典　B6　二八〇〇円　鈴木・広田編

類義語辞典　B6　二二〇〇円　徳川・宮島編

表現類語辞典　B6　四八〇〇円　藤原与一他編

新版　文章表現辞典　B6　二九〇〇円　神鳥・村松編

東京堂出版　101東京都千代田区神田錦町3-7　電話03—233—3741～2